

# 飛鳥時代 寺の始まり

令和4年7月2日

齋木 敏夫

## 飛鳥寺創建前の仏教にかかわる状況

538年百済の聖明王から仏像や経典が贈られたが我が国では信仰されず、信仰を促すため577年には百済から経論や律師、禪師、比丘尼、呪禁師、造仏工、造寺工をよこしたと日本書紀に記載されている。この頃は北方の高句麗、南の新羅からも盛んに文化を取り入れていたようだ。このような状況で587年に蘇我氏と物部氏との戦い（丁未の変）が起こり、蘇我馬子は戦勝を誓願し、飛鳥寺を建てることを誓ったとされる。戦に加わった聖徳太子も四天王寺を建てることを誓った。戦いに勝利した蘇我氏は588年に百済に本格的な寺院建立の為技術支援を要請し、これにこたえて恵総ら6人の僧侶と寺工2人、路盤工1人、瓦博士4人、画工1人を送り込んできた。更に仏舎利も届き、これにより本格的に仏教が取り入れられた。百済は当時の中国南朝と繋がっていたようで日本の仏教は中国の南朝からの伝播となり、今でもお経は呉音で読まれている。594年に推古天皇が「仏法興隆の詔」を出すと豪族達が氏寺を建てるようになり、次第に古墳が造られなくなってきた。

## 飛鳥五大寺 1、坂田寺、

明日香村阪田にあった寺で司馬達等が草庵を結んだのに始まる。奈良前期まで栄えたが平安時代には衰微した。跡地東南に浄土宗の金剛寺がある。奈良時代には坂田寺の信勝尼が737年に経典を内裏に進上したことや749年に東大寺大仏殿の東脇侍を献納したことも知られている。日本書紀に「約4.85メートルの仏像と寺を建てて奉った。坂田寺の木製の仏像と脇侍の菩薩がそれである。」と記されている。跡地から金堂・講堂の北東には鎮壇具を納めた土坑がみつき、鏡・金箔・絹糸・銅銭・水晶玉などが出土している。

## 2. 大官大寺

香具山の南に文武天皇が建立に着手した国家の寺で最高位の官寺であった。現在「金堂跡」「塔基壇跡」の標石がある。金堂と講堂は完成、九重塔本体はほぼ完成していたが建設途中の711年に火災により全て灰燼に期した。716年平城京で再建が開始され、大安寺となった。大官大寺の多くの資財が大安寺に引き継がれたことは大安寺資財帳によって確認されている。

## 3. 法興寺(飛鳥寺)

588年蘇我馬子が発願した日本最古の寺が596年に創建された。礎石の上に柱が建ち、日本初の瓦屋根のある寺で名は法興寺となった。文字通り仏法を興隆させるために建てられ、名付けられた寺だ。一塔三金堂の伽藍配置で高句麗の影響も大きく、百済・高句麗の支援を得て建立されたとされる。平城遷都に伴い寺は移され、元法興寺を意味する元興寺となり、現在も残されている。

本堂と禅室に葺かれている瓦の約14%が飛鳥寺のものでそのうち4%の約170枚が法興寺創建時のものだそうだ。法興寺は名が飛鳥寺と変り、現在は安居院とも呼ばれ、609年開眼、日本最古の飛鳥大仏（釈迦如来坐像、重文）が祀られている。このような立派な寺と仏像を造ったことは隋や朝鮮半島諸国から来た人たちに我国の文化水準の高さを示し、外交上の優位性を維持するのに役立つことを狙ったものだと思われる。

#### 4. 豊浦寺（トユラデラ）桜井寺、向原寺

百済の聖明王から金銅の釈迦仏や経典が献上された時に礼拝の可否を問うたところ、蘇我稲目がこれに賛意をとなえ、その仏像を賜り、向原(ムカラ)の家を寺として安置した。その後悪疫が流行し、これを国神のたたりだと奏したため仏像を難波の堀江に流し捨て、寺は焼きはらわれたといわれる。581年に再建されて桜井寺となり、百済から帰朝した善信尼が住み、日本最初の尼寺となった。豊浦宮で即位した推古天皇は603年豊浦宮地と桜井寺地とを交換し、旧宮跡に桜井寺を移し、豊浦寺の地に移った宮を小墾田宮と称したといわれる。現在は江戸時代に建立された向原寺があり、門前や境内に金堂・講堂などの礎石がみられ、伽藍配置の一部が明らかになり、寺跡であることを裏づけている。寺の近隣に仏像が投じられた伝承のある「あみだ池」があり、遠く離れた難波まで行って捨てたのではなく仏像を別邸近くの池に捨てたのではないかと思われる。実際江戸時代に観音菩薩の頭部がこの池から見つかっている。

#### 5. 川原寺 跡地は国の史跡 弘福寺（グフクジ）

斉明天皇の川原宮跡地に創建した寺。伽藍配置は一塔二金堂式、創建の時期不明。673年川原寺において初めて一切経を書写したと記されている。川原寺裏山からは、縦横とも20cmほどの板状の埴に三尊仏を浮き彫りにした三尊埴仏や塑像の断片が大量に発掘され、遺構として礎石と塔跡が残る。埴とは土製品を焼いたもので、材質的には煉瓦に近い。

#### 聖徳太子建立の7寺 1. 四天王寺

隋や朝鮮三国の使者たちに見せるため飛鳥への入り口にあたる地に593年聖徳太子が建立させた日本最初の官寺で百済の王興寺の伽藍配置である中門、塔、金堂、講堂が一直線となる形式で日本では四天王寺式と云われている。この伽藍配置は609年に建立されたといわれる若草伽藍から出土した斑鳩寺の遺構にも確認できる。現在の建物は戦後の再建であるが聖徳太子が祀られ、法隆寺金堂に見られる人字型割束、卍崩しの勾欄、雲形肘木、栴、玉虫厨子に見られる鋳葺の屋根等が再現されており、創建当時の様式が残されている。

#### 2. 斑鳩寺（法隆寺）

**設立の理由** (1) 難波の港に近く、大陸との外交に至便である斑鳩の地に602年聖徳太子は斑鳩宮を造営し始め、605年に移り住んだ。これは飛鳥への途中にあり、使者に立派な建物があることを見せる為であった。607年二回目の遣隋使を派遣し、翌年唐の使いの裴世清が来てこの伽藍を見た。

(2) 用明天皇の意思をかなえるため。

銅造薬師如来坐像（国宝）の光背銘には「用明天皇が自らの病氣平癒の為薬師如来の造立を發願したが用明天皇がほどなく亡くなった為、遺志を継いだ推古天皇と聖徳太子が607年像と寺を完成させた」という趣旨の記述がある。伽藍配置は四天王寺式で塔の心礎が地上にあるのが他の塔との違いだ。今も若草伽藍で見ることができる。これは新羅の影響を受けている。当時新羅を撃つとの議論もあったが聖徳太子は「和をもって尊しとなす」の精神から友好に努めており、留学僧が新羅船に乗って帰朝している。670年に斑鳩寺は焼失した。

### 西院伽藍 金堂（国宝）世界遺産

金堂は斑鳩寺焼失以前に聖徳太子を祀る単独のお堂として建て始められたようだ。入母屋造、平入の建物で雲斗、雲肘木によって構成される組物があり、柱はエンタシスの丸柱、勾欄には卍崩しや人字形割束など、飛鳥建築の特徴がみられる。これは古く見せる為に斑鳩寺焼失前の様式を真似たものであろう。金堂の天井板は年輪年代法により668年頃の伐採が確認されており、670年斑鳩寺焼失以前に聖徳太子の徳を慕う人がお堂を建立し始めたと思われる。正面中央に聖徳太子等身大の像と伝わる釈迦三尊像が安置され、西の間に聖徳太子等身大の像と伝わる求世観音立像を祀ったようだ。その他玉虫厨子も祀られていたようだ。

**斑鳩寺焼失後** 本格的な寺とする為五重塔、中門、回廊が造られ、7c後半に西院伽藍が完成した。しかし急遽寺院としたため伽藍配置は後に法隆寺式といわれる特異なものとなった。古く見せる為勾欄には斑鳩寺の様式である卍崩しや人字形割束を配し、軒には雲斗、雲肘木がある。焼失した斑鳩寺の本尊薬師如来坐像を再度造り直し、東の間に安置したようだ。現在屋根に裳階が付いているが壁を守るため後世屋根の垂れ下がりを防ぐために付けられたようだ。

**玉虫厨子（国宝）** 屋根は入母屋造、鏝葺（瓦をずらしながら重ねていく技法）が用いられ、雲形組み物を使い、飛鳥時代の建築様式を伝えている。厨子は仏像、仏画、舍利、経典等を安置する屋根付きの入れ物で台座の上に入母屋造の宮殿部をのせ、側面に捨身飼虎図と施身聞掲図等が描かれている。

**五重塔（国宝）** 古代インドで仏舎利を祀るために造られた塔を仏塔といい、五重塔は仏塔である心柱を覆う五重の屋根を持つ覆い屋と云える。後に真言密教が広まると心柱を大日如来に見立てる塔もできるようになった。世界最古の木造五重塔で心礎内に舍利容器がある。屋根の逡減率が1/2と高い。初重の内部の北に釈迦の涅槃、東に文殊菩薩と維摩居士の問答、南に弥勒の浄土、西に分舎利の塔本四面具がある。

**中門（国宝）** 入母屋造、二重門。正面は四間二戸と陰数、寺の門は正面の柱間が陽数になるのが普通だが真中に柱が立ち特異である。金堂と同様にエンタシスの丸柱、勾欄に卍崩しや人字形割束があり、左右に塑造金剛力士立像（重文）を安置する。日本最古（8世紀初）の仁王像であるが、風雨にさらされる場所で保存状態がよくない。

**回廊**（国宝） 廊下であると共に聖域を区切る障壁で当初の廻廊は大講堂前で閉じていた。太いエンタシスの柱があり、梁には緩いむくりがつけられおり、これで本瓦葺きの屋根の重しを左右に逃がしているのも面白い造りだ。

### 3. 蜂丘寺（広隆寺）

秦氏の氏寺で平安京遷都以前から存在した京都最古の寺院だ。聖徳太子信仰の寺でもある。平安時代に現在地に移ったものでそれ以前の地はわからないが国宝の弥勒菩薩半跏像 2 体は飛鳥時代のものだ。

### 4. 池後寺（法起寺）世界遺産

聖徳太子が法華経を講じた「岡本宮」の跡地に山背大兄王が寺に改めたのが始まりと伝えられている。伽藍は法隆寺とは逆に金堂が西、塔が東に建つ。706 年建立の三重塔(国宝)は高さ 24m で、三重塔としては日本最古だ。日本の木造塔は方三間が原則だがこの塔は初層・二層の柱間が方三間、三層の柱間が方二間という特殊な形式で法隆寺五重塔の初層・三層・五層と同じ形式とした為だ。

### 5. 中宮寺

寺は飛鳥時代現在地より約 500m 東方に創建された。旧地の発掘調査で四天王寺式伽藍配置であったと判明した。斑鳩寺と同範の瓦も出土し、斑鳩寺と中宮寺は僧寺・尼寺の関係にあったようだ。寺伝では本尊如意輪観音(国宝)は当初からの金堂の本尊であるとしている。そのほか日本最古の刺繍天寿国曼荼羅繡帳（国宝）が残されている。

### 6. 橘寺（聖徳太子生誕地）境内史跡

8 世紀には堂宇が立ち並ぶ大寺院で四天王寺式伽藍配置をとっていたようだ。名は垂仁天皇の命により不老不死の果物を取りに行った田道間守が持ち帰った橘の実を植えたことに由来するそうだ。境内には飛鳥時代の石造物で左右に善相と悪相が彫られた二面石 や五重塔跡に塔心礎が残されている。

### 7. 葛木寺（尼寺） 記録に残されているが所在不明.

#### 聖徳太子ゆかりの河内三太子 叡福寺「上の太子」、

太子薨去後、推古天皇より方六町の地を賜り、霊廟を守る香華寺として僧坊を置いたのが始まり。妃 膳部大郎女と 2 か月前に亡くなられた母穴穂部間人皇后と共に横穴式石室の円墳に埋葬され、三骨一廟といわれるようになった。724 年聖武天皇の勅願により七堂伽藍が造営されたと伝えられている。

#### 野中寺「中の太子」境内史跡

創建は 650 年頃のような。境内に残る礎石から飛鳥時代から奈良時代前半には大規模な伽藍が存在したことは明らかで境内には中門跡・金堂跡・塔跡・講堂跡・回廊跡など法隆寺式伽藍配置を示す礎石がある。666 年造像の金銅弥勒菩薩半跏像（重文）が残されている。

## 大聖勝軍寺「下の太子」

594年に推古天皇より現在の山号と寺号が贈られたことによりこの年を創建年としている。

門前に「聖徳太子と四天王像」があり、丁未の変で貢献したとされる4名を四天王に準えている。

「持国天」＝「蘇我馬子」「増長天」＝「小野妹子」「広目天」＝「迹見赤檮（とみのいちい）

「多聞天」＝「秦川勝）」である。

## 法輪寺

聖徳太子の病氣平癒を祈願して622年山背大兄王創建と伝えられ、飛鳥時代の薬師如来像と虚空蔵菩薩像が残されている。伽藍配置は東に金堂、西に塔が建ち法隆寺式の伽藍配置であった。昭和19年落雷により消失、現在昭和50年西岡常一棟梁により再建された飛鳥様式の三重塔を見ることができる。

## 当麻寺

寺伝では681年創建と伝わる、現在の本尊は当麻曼荼羅であるが当初は日本最古の塑像である弥勒仏坐像（国宝）が本尊であった。その他梵鐘（国宝）と金堂の正面に立つ石燈籠（重文）も白鳳時代のもので日本最古だ。

## 妙楽寺（談山神社）

創建は678年。藤原（中臣）鎌足の長男定恵が唐からの帰国後に父の墓を当地に移し、その墓の上に十三重塔を造立したのが発祥である。談山の名は鎌足と中大兄皇子が大化の改新の談合を行い、後に「談い山（かたらいやま）」と呼んだことによるとされる。

## 百濟寺 境内史跡

606年創建、聖徳太子建立と伝わる近江の最古の寺院、現在は湖東三山の一つでモミジの名所だ。

## 善光寺

600年信濃守大番が役目で都へ来た時、お伴の本田善光が難波の浦を通りかかった時、水中より光り輝く一光三尊仏が出現した。それを善光は飯田市元善光寺に祀り、642年現在地に遷座した。644年に勅願により伽藍が造営され、本田善光の名を取って「善光寺」と名付けられた。白鳳時代の川原寺様式を持つ瓦が発見され、7世紀後半頃にはかなりの規模を持つ寺院がこの地に建立されていたことがわかってきた。現在の本堂（国宝）は1707年の再建、一重裳階付き、屋根は檜皮葺の撞木造の建物となっている。

## 本薬師寺 跡 特別史跡

680年天武天皇の発願により、藤原京の畝傍山と香久山の間にあたる地に造営が開始された。698年にほぼ完成、伽藍配置は中央に金堂、手前に左右対称の東塔と西塔を配置しており、現在の薬師寺と同じであったことが礎石から確認できた。この伽藍配置は新羅の四天王寺の影響を受けている。伽藍は11世紀まで存続していたようだ。平城遷都後に現在地に移転し、新しく伽藍造営が行われた。

## 岡寺

633年義淵僧正が草壁皇子の岡宮をもらい創建。岡寺と呼ばれているが創建時の正式名は龍蓋寺であった。飛鳥の地を荒らしていた龍を義淵が池の中に封じ込め、大きな石で『蓋』をし、改心させたことから名付けられたと伝わる。西隣の治田神社境内から古瓦が発掘されており、当初寺はその地にあったようだ。本尊は天平時代作の如意輪観音坐像(重文)で像高4.6mで日本最大の塑像だ。

## 山田寺跡 (特別史跡)

蘇我倉山田石川麻呂の発願により7世紀半ばに建て始められ、643年には金堂の建立が始まった。648年に僧が住み始め、その翌年に石川麻呂は謀反の咎を受け、金堂前で自決した。持統天皇は石川麻呂の孫であり、寺の完成に尽力した。678年に「丈六仏像を鑄造」と記されている。この仏像は平重衡の焼き討ちにより焼失した興福寺の講堂の復興に際し、僧兵が山田寺から強奪してきた薬師如来と考えられ、現在は頭部のみが現存し、国宝に指定されている。遺跡から中門・塔・金堂・講堂が南から北へ並ぶ四天王寺式の伽藍配置が明らかになり、更に鴟尾・鬼瓦・瓦なども発見されている。東回廊の連子窓(重文)が土に埋もれているのが見つかり、飛鳥資料館に展示されている。

## 山科寺 厩坂寺 興福寺

山階寺 667大津京に都が移り、藤原鎌足も山科に居を移した。669年藤原鎌足は狩で落馬し、背中を強打した。その平癒を願い、夫人の鏡大王が山科の私邸の一角に釈迦三尊像を本尊として寺を創建したのが始まり。672年に山階寺は藤原京の厩坂へ移築され、厩坂寺と改称した。710年に平城京に都が移ると藤原不比等が現在地に寺も移し、興福寺と名を変えた。

## 参考文献

法隆寺夏期大学講演録 57回～62回

寺院建築 山川出版社

お寺で読み解く日本史の謎 河合 敦 PHP文庫